

風とかなしみ

——芭蕉「さらしな紀行」を読む

竹内整一

ルネサンス 文芸復興（古が新を生む）

「あらためる」（吟味・確認する→新たに作る）

わが心慰めかねつ更級や 姨捨山に照る月を見て

（『古今和歌集』）

1 「さらしな紀行」

さらしなの里 姨捨山の月見んこと、しきりにすゝむる秋風の心に吹さわぎて、ともに風雲の情を狂すもの又ひとり、越人と云。木曾路は山深く道さがしく、旅寐の力も心もとなしと、荷分子が奴僕をして送らす。おのおの心ざし尽すといへども、駅旅の事心得ぬさまにて、ともにおぼつかなく、ものごとのしどろにあとさきなるも、なかなかにおかしくき事のみ多し。

何々と云ふ所にて、六十ばかりの道心の僧、おもしろげもおかしげもあらず、ただむつむつとしたるが、腰たわむまで物おひ、息はせはしく、足はきざむやうにあゆみ来れるを、ともなひける人のあはれがりて、おのおの肩にかけたるもの共、かの僧のおひね物とひとつにからみて、馬に付けて、我をその上へのす。高山奇峰頭の上におほひ重なりて、左は大河ながれ、岸下の千尋のおもひをなし、尺地も平らかならざれば、鞍の上しづかならず。只あやうき煩ひのみやむ時なし。

棧はし、寝覚など過て、猿が馬場・たち峠などは四十八曲がりとかや、九折重なりて、雲路にたどる心地せらる。歩行より行くものさへ、眼くるめき、たましひしほみて、足さだまらざりけるに、かのつれたる奴僕、いともおそろゝけしき見えず、馬の上にてたゞねぶりに眠りて、落ぬべき事あまたたびなりけるを、あとより見あげて危き事かぎりなし。仏の御心に衆生のうき世を見給ふもかゝる事にやと、無常迅速のいそがはしきも、我身にかけり見られて、阿波の鳴戸は波風もなかりけり。

夜は草の枕を求めて、昼のうち思ひまうけたるけしき、むすび捨たる発句など矢立取出て、灯のもとに目をとち、頭をたゞきてうめきふせば、かの道心の坊、旅懐の心うくて、物思ひするにやと推量し、我を慰んとす。わかき時拝みめぐりたる地、あみだの尊き数を尽し、おのがあやしと思ひし事ども嘶つゞくるぞ、風情のさはりとなりて、何を云出ることもせず。とてもまぎれたる月影の、壁の破れより木の間がくれにさし入て、引板の音、鹿おふ声、処々に聞えける。まことにかなしき秋の心、ここに尽せり。「いでや月のあるじに酒ふるまはん」といへば、さかすき持出たり。よのつねにひとめぐりも大きに見えて、ふつゝかなる時絵をしたり。都の人は斯るものは風情なしとて、手にもふれざりけるに、思ひもかけぬ興に入て、青宛玉匣の心地せらるゝも処がらなり。

2 更科姥捨月之弁

……ことし姥捨の月みむことしきりなりければ、八月十一日みのの国をたち、道とほく日数すくなければ、夜に出でて暮に草枕す。思ふにたがはず、その夜さらしなの里にいた

此の世の風情
 風情の世
 風情の世
 風情の世
 風情の世

ぼんぼり
 ぼんぼり
 ぼんぼり
 ぼんぼり
 ぼんぼり

山は八幡といふ里より一里ばかり南に、西南に横折り伏し、すさまじく高くもあらず、
 かどかどしき岩なども見えず、只あはれ深き山のすがたなり。「なぐさめかねし」といひ
 けんもことわりしられて、そぞろに悲しきに、何故にか老たる人を捨たらんと思ふに、い
 とど涙も落そひければ、

おもかげ
 倂や姨ひとり泣月の友
 いざよひもまだ更科の郡哉

拾遺愚集
 新字源
 明解国語辞典

おもかげ (倂、面影)

「おも」 面・正面・前面 (おもて・おもむく・おもしろし・おもふ)

① 日・月・燈火などの光 (日影・月影)、それによって見える姿 (人影)

② 光が物に当って光の反対側に生じる暗い像 (日影・物陰)

オモは顔の正面、カゲは光によって現れる像。実体はそこに存在しないが、思い出や夢、
 想像でありありと思ひ浮かんでくるものの姿。

cf 「倂」 (国字) 弟は兄に似ているので、人と弟をあわせて、似姿、「おもかげ」の
 意を表わす。

更級は昔の月の光かは ただ秋風ぞ姨捨の山 (藤原定家『拾遺愚集』)

3 風 予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂白の思ひやまず、...そぞろ神の物に
 つきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて取るもの手につかず、... (奥の細道)

花鳥風月 cf 秋來ぬと目にはさやかに見えねども 風の音にぞ驚かれぬる (藤原敏行『古今和歌集』)

かぜ (風)

① 物を吹き動かし、体には涼しさ・冷たさなどを感じさせる空気の流れ。

② 人に対する世間のしきたりや流儀。「―がそよそよ」「びゅうびゅう」吹く「― (＝風向き) が変わる」

③ 《名詞に付いて》いかにもそれらしい態度・ようす・そぶりである意を表す。『明解国語辞典』

涼風・薰風・微風・突風
 風光・風景・風土・風物

風情の世
 風情の世
 風情の世
 風情の世

寂しさの極みに堪へて天地に寄する命をつくづくと思ふ (伊藤左下夫「信州数日」)

世阿弥「姨捨」

↑「わが心慰めかねつ更級や 姨捨山に照る月を見て」

独り捨てられて老女が、昔こそあらめ今もまた、姨捨山とぞなりにける、姨捨山となりにけり。

5 いのちの「かなしみ」

富士川のほとりを行くに、三つばかりなる捨子の哀れげに泣く有り。この川の早瀬にかけて、うき世の波をしのぐにたへず、露ばかりの命を待つ間と捨て置きけむ。小萩がもとの秋の風、こよひや散るらん、あすや萎れんと、袂より喰物を投げて通るに

猿を聞く人捨子に秋の風いかに
いかにぞや 汝、父に悪まれたるか、母に疎まれたるか。父は汝を悪むにあらじ、母は汝を疎むにあらじ。ただこれ天にして、汝が性のつたなきを泣け。

(芭蕉『野ざらし紀行』)

6 表現する「い」で救われる

「孤独について」
物が真に表現的なものとして我々に迫るのは孤独においてである。そして我々が孤独を超えることができるのはその呼び掛けに応える自己の表現活動においてのほかない。アウグスティヌスは、植物は人間から見られることを求めており、見られることがそれにとつて救済であるといったが、表現することは物を救うことであり、物を救うことによつて自己を救うことである。

(三木清『人生論ノート』)

cf 1

子どもを亡くしたあざらしが、その「かなしみ」をあちこちに訴える。お月様にも訴える。しかしどうしようもない。子供をなくした、親のあざらしが、夜も眠らずに、氷山の上で、悲しみながらほえているのを月がながめたとき、この世の中のたくさんの悲しみに、慣れてしまつて、さまで感じなかつた月も、心からかわいそうだと思ひました。……しかし、月は、自分の力で、それをどうすることもできませんでした。……「この北海の上ばかりでも、幾ひきの子供をなくしたあざらしがいるかしのれない。しかし、おまえは、子供にやさしいから一倍悲しんでいるのだ。そして、私は、それだから、おまえをかわいそうに思っている。そのうちに、おまえを樂しませるものを持つてこよう」……北の海の海は、依然として銀色に凍つて、寒い風が吹いていました。そして、あざらしは、氷山の上に、うずくまっています。あざらしは、その太鼓が気にいったとて、月は、太鼓をあざらしに渡してやりました。あざらしは、その太鼓が気にいったと

みえます。月が、しばらく日をたった後に、このあたりの海上を照らしたときは、氷が解けはじめて、あざらしの鳴らしている太鼓の音が、波の間から聞こえました。

(小川未明「月とあざらし」)

cf2 監督と役者の関係を越えて、濃密な楽しい時間を共有させて頂きました。体が弱ってからもどこかその、初めての体験を面白がっているようなところが、凄みと軽やかさの同居した姿は神々しくさえありました。(是枝裕和「朝日新聞」9月17日)

7 更級・姨捨の風光

月の名所、いづくはあれど更科や、姨捨山の曇なき、一輪満てる清光の影、…弥陀光明に、しくはなし。

(世阿弥「姨捨」)

「長楽寺からの眺望はまことにすばらしい。このすばらしさの本質は、世俗との間隔・距離にあるようだ。垢にまみれた現実の人間生活を適度に客観化出来る位置にあるのである。三千メートル級の高山ではこのような快感は得られない。聖と俗との適度な交流、宗教的な意味もふくめて両者の境界が近世の姨捨山を誕生させたとも考えられる。

(矢羽照幸「姨捨・いしづみ考」)

「世俗との間隔・距離」、「現実の人間生活を適度に客観化出来る位置」、「聖と俗との適度な交流」、「両者の境界」

あわい ← 聖と俗、自然と生活、両者の「あわい」の織りなす風景

「合ふ合ふ」の約。相向う物と物との間の空間。転じて、二つのものの関係」が原義。

向いあった二つのもののあいだの空間、間隔や、相互の関係(配色、釣合い、衣装の色合い、また、人と人との関係、仲)などを表す。 (『岩波古語辞典』)

さらしな・姨捨の場 ↓ 聖と俗、自然と生活、両者の「あわい」の織りなす風景

(西脇いうところの「文化」が営まれうる場)

国木田独歩の光景論

一種の生活と一種の自然とを配合して一種の光景を呈しおる場処を描写することが、そこぶる自分の詩興を喚び起こすも妙ではないか。なぜかような場処が我らの感を惹くのだらうか。自分は一言にして答えることができる。すなわちこのような町外の光景は何となく人をして社会というものの縮図でも見るような思いをなさしむるからであらう。言葉を換えていえば、田舎の人にも都会の人にも感興を起こさしむるような物語、小さな物語、しかも哀れの深い物語、あるいは抱腹するような物語が二つ三つそこらの軒先に隠れているように思われるからであらう。

(「武蔵野」)

均 4生